令和元年度 船原古墳講演会

『ここまでわかった！
船原古墳１号土坑の中身！！』

講演会資料集

日 時　令和元年11月30日（土） 14時 開始

会 場　リーパスプラザこが多目的ホール（福岡県古賀市中央2丁目13−1）

主 催　古賀市教育委員会

問い合わせ先　文化課文化財係　TEL：092（940）2683

プログラム

14：00　開会のことば

14：05　主催者 あいさつ

14：10　報告　古賀市教育委員会文化課　西 幸子

「船原古墳１号土坑から出土した遺物とその埋納状況」

14：50　休憩

15：00　講演　福岡大学人文学部　桃崎 祐輔 教授

「船原古墳１号土坑から出土した馬具と馬装復元の課題

－鉛ガラス雲珠・辻金具と遣隋使の開始－」

16：00　謝辞

16：05　閉会のことば

目　　次

「船原古墳１号土坑から出土した遺物とその埋納状況」　１頁

「船原古墳１号土坑から出土した馬具と馬装復元の課題　４頁

－鉛ガラス雲珠・辻金具と遣隋使の開始－」

令和元年11月30日（土）14：10～14：50　　於リーパスプラザこが交流館多目的ホール

「船原古墳1号土坑から出土した遺物とその埋納状況」

西　幸子(古賀市教育委員会)

はじめに

平成25年3月に発見された船原古墳1号土坑は、出土遺物の量の豊富さ、内容の装飾性・重要性・特異性から早々に話題となり、国内外の研究者、地域住民や考古学ファンのみならず、多くの人々の注目を集める遺跡となった。しかし、船原古墳の特異性を際立たせるのは、何も出土遺物の内容だけではない。普通、被葬者と共に石室に埋納されるはずの遺物が、古墳墳丘外の土坑に、しかも人体埋葬を伴わず埋納品のみを納める点も、特異性の1つで重要な検討課題である。つまり、土坑内の遺物埋納状況の把握・検討なしには、船原古墳の被葬者と土坑群の様相解明は不可能である。よって、本稿ではこれまでの調査で見えてきた船原古墳1号土坑内の遺物出土状況を把握し、土坑内の遺物埋納状況を整理・検討したい。

1. 遺物取り上げ後の船原古墳1号土坑の調査

通常、埋葬された有機質は長期の土中埋納で分解・消滅し、ほとんど形状把握はできない。しかし、1号土坑は多湿という好条件に恵まれた結果、金属器のみならず木質や繊維等の有機質が多分に遺存していた。遺物は重要文化財級、しかも有機質との関係も検討できる、研究上非常に重要な資料と判断されたため、九州歴史資料館の全面協力の下、現場では各遺物を分離せず、ブロック単位で取り上げ、持ち帰った室内でクリーニング作業を進めつつ、各遺物の検討、有機質の分析をすることとなった。

取り上げた遺物は九州歴史資料館でブロックごとにX線CTで撮影し、その画像から遺物の種類・数量等を確定、そしてクリーニング作業を実施し、作業が終わり分離された遺物から、順次報告書作成に向けて実測図を作成している。そして、今年度後半からは遺物に付着する有機質の分析・検討も開始した。

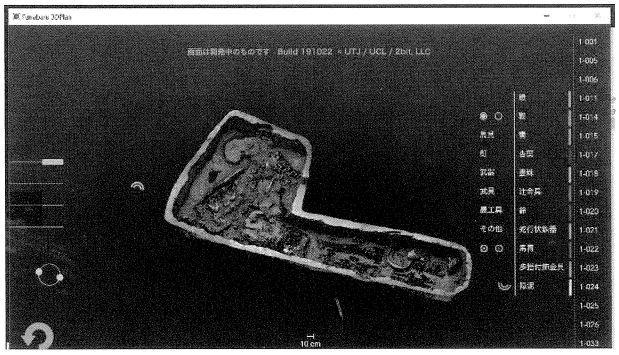


図1　開発した3D図面

また、抽出された各遺物の三次元画像と発掘現場で撮影した三次元測量データの合成データ、並びにソフト(以下、3D図面)を外部委託で作成してきた(図1)。このデータは作業の進捗に合わせて常時更新されており、常に最新の情報を盛り込んだ状態で、各遺物の出土状況が把握できる優れものである。よって、今回はこの3D図面を活用しつつ、1号土坑内の遺物の出土・埋納状況を把握・整理していきたい。

2. グループ別、1号土坑出土遺物の様相

1号土坑出土遺物は、遺構内に残る収納具の痕跡と、出土遺物の痕跡・機能から、位置ごとに7グループに分離できるので、今回は便宜上①～⑦に分けて様相を見ていく(図2)。

① 弓とその上にある遺物のグループ

逆L字形土坑の北側、全長約2mの弓が約10～12張敷き詰められた箇所である。漆塗り弓で、銀製弭3点と、両頭金具を数点伴い出土した。よって、

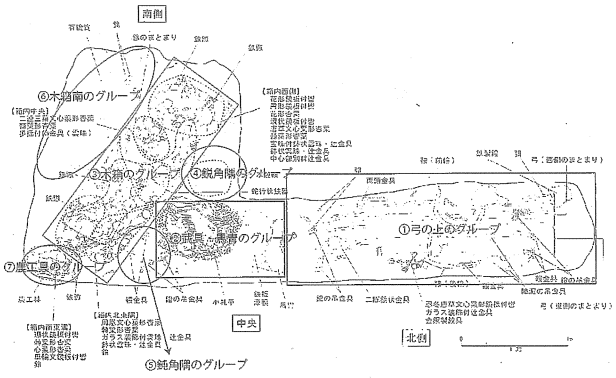


図2　1号土坑内各グループの配置図

名称	位置	鞍	鞍金具	鐙	鐙鞦金具
鞍A	①	木装鞍	円形半球状鞍座金具、刺金無、鞍脚を均等に絡める(003、004)	木製壺鐙	鉸具(498、500)+U字形吊金具(005、504)
鞍B	①	金銅装鞍(007、009、192、193、217)	鞍座金具無、刺金無、鞍脚を均等に絡める(218)	鉄製壺鐙(001、006)	鉸具(002)
鞍C	①	木装鞍	なし	木製壺鐙	鉸具(010、214)+U字形吊金具(194、483)
鞍D	①	木装鞍	なし	漆塗木製壺鐙	U字形吊金具(011、014)
鞍E	①	木装鞍+二脚鋲状金具(027、043、044、232、505、506)	半球円形状鞍座金具、刺金無、鞍脚を均等に絡める(227)	木製壺鐙	鉸具(022)+兵庫鎖(018、023、024)+U字形吊金具(017、026)
鞍F	④	漆塗木装鞍	なし	木製壺鐙？	木箱内の鐙鞦金具(380+449、389+396)と組合うか？
鞍G	⑤	木装鞍	円形半球状鞍座金具、刺金無、鞍脚を均等に絡める(032、106)	木製壺鐙	鉸具(033、034、076-1)+兵庫鎖(35、036、078、079)+U字形吊金具(037、080)

表１　１号土坑出土鞍整理表(番号は 3D 図面での遺物整理番号)

弭装着弓が最低 2 張、両頭金具装着弓が最低 2 張ある。弓の上からは馬具が出土し、現在確認できる遺物の形状と出土状況から、計 5 点の鞍・鐙セット(表１の鞍 A～E)と心葉形忍冬唐草文鏡板轡+ガラス装飾付辻金具の面繋セットが置かれる。鞍のうち、金銅装鞍 B 北側からは、障泥金具(透心葉形Ｉ類Ｃタイプ)が 3 点出土した。懸垂方法・位置は今後検討が必要だが、金銅装鞍には障泥も垂下されたとわかる。

弓敷きの上に遺物を乗せる埋納行為の例として、大阪府高槻市土保山古墳(5 世紀後半)粘土槨 2 号槨がある。この 2 号粘土槨も後述する遺物だけを埋納した遺物埋納専用施設だが、遺物は組合式木棺に収納し埋められていた。現在①グループで明確な木箱の痕跡は確認できていないが、未クリーニングの弓の下に箱を成す木材がある可能性も考慮に入れ、今後整理作業を進める必要もある。

② 武具・馬冑のグループ

土坑中央部、①グループの南に隣接し、馬冑と小札甲等がまとまる個所である。北側で馬冑が上下逆転して、南側で肩甲・頸甲を伴い、小札甲が蛇腹状に折りたたまれた形状で出土した。その間には漆膜と鉄板が絡む塊があり、CT 画像から縦矧板革綴冑 1 鉢分と目される。また、馬冑から小札甲の下一面に漆膜の広がりが確認できる。馬甲や鎧櫃等の可能性があるが、クリーニング前のため詳細不明。

③木箱のグループ

土坑南側の広がり中の、斜めに置かれた木箱該当箇所である。木箱小口側で集中的に出土する鉄釘付着木質の繊維方向の分析から、木箱は底板・側板・小口板全てに杉の板目材を使った木箱と解明された(小林他 2017)。法量は約 200 ㎝×80 ㎝で、側板側でまとまった大型釘の出土がないので、筆者は脚のない木箱と推測する。最下層には漆膜の広がりも見られるので、漆塗木箱の可能性も考えられる。木箱内には面繋・尻繋を構成する馬具を中心に、鐙鞦金具、鈴、蛇行状鉄器、革帯飾金具が型式ごとにある程度まとまって出土する。また、馬具以外にも鉄鏃や、打ち出しや毛彫、列点紋装飾のある金銅板等が出土した。金銅板は今年度の解析の結果、形状と文様が明らかになりつつある。しかし、馬具のセット関係等について、残念ながら現在、従来以上の見解を持ち合わせていない。今年度開始した有機質の分析・検討と絡め、各遺物の用途およびセット関係を解明していく必要がある。

④鋭角隅のグループ

土坑の屈曲部、②武具・馬冑のグループと③木箱のグループに挟まれた西側の箇所である。金属製の遺物はないが、鞍の海部の形状を呈する漆膜が検出されたため、金属部品のつかない漆塗の木製鞍(表１の鞍 F)があったと想定される(古賀市教育委員会 2019)。

⑤鈍角隅のグループ

小札甲横に位置する、②武具・馬冑のグループと③木箱のグループに挟まれた、土坑東側の箇所である。円形半球状の鞍座金具に、均等に絡める鞍脚、刺金のない鉸具を持つ鞍金具が 2 点、三連式兵庫鎖に鉸具とＵ字形吊金具のつく鐙鞦金具が二個体分出土した。よって、木製鞍１点と木製壺鐙一双があったと

わかる(表1の鞍G)。最下層で漆膜の検出があるが、鞍・鐙との関係は現在不明。遺物の出土状況から木箱側に後輪、小札側に前輪を向け、鞍の両側に鐙を垂らした状態で埋納されたと判断される。

⑥木箱南のグループ

土坑の南西端、③木箱のグループの南西、床面から浮いた有機質の塊と鈴、金箔付き漆塊、及び小型鉄釘類出土箇所である。有機質と鈴、漆塊は未検討のため詳細不明。小林氏らの鉄釘の検討から、底板に板目材、側板と小口板に柾目材を使った木箱の存在が明らかとなった(小林他 2017)。鉄釘周辺で金属器の出土はないので、木箱内に物が収納されていた場合、有機質製の物が入っていたと推測される。

⑦農工具のグループ

逆L字型土坑の最南東端、農工具がまとまる箇所である。U字形刃先、鉄鎌、鉄斧2点が出土した。出土状況から、U字形刃先は木製柄に装着されたまま刃部を上に向け埋納されたと目される。実際、鉄鎌には錆化した木製柄が付着して出土した。埋納坑掘削に使用した工具をそのまま埋納したものだろうか。

以上、1号土坑内の遺物の出土・埋納状況について、今日までの整理作業成果を基に様相の把握と整理を試みた。結果、③木箱のグループ、⑥木箱南のグループ以外の箇所は、ある程度具体的に遺物埋納状態を把握できたように思う。しかし、まだ整理作業途中ということもあり、未検討な部分、さらに有機質の分析結果と絡めた検討が必要な部分など、十分に把握しきれていない箇所も多い。有機質の分析・検討も含め、今後も船原古墳出土遺物整理作業を精力的に進めていく所存である。そこで明らかになった成果を盛り込みつつ、考古学的検討を加え、船原古墳という遺跡の様相解明に努めていきたい。

3. 遺物埋納専用施設について

最後に、船原古墳1号土坑が遺物埋納専用施設である点から若干の検討を試みたい。発見当初、船原古墳と土坑群は標高と距離差から関係性を疑問視されたが、墳丘と土坑出土須恵器片の接合で、疑問は解消された。さらには近年、古墳と土坑群間の低丘陵の段差は墳丘と組み合うことで盛土以上に墳丘範囲を大きく視認させる構成要素だとし、その認識下での土坑群への遺物埋納も想定されている(小嶋 2018)。

このように、船原古墳では古墳の祭祀の一環として墳丘外に遺物を埋納するが、同じ祭祀を行う古墳はこれまで未検出である。しかし、副葬品だけを埋葬する、いわゆる遺物埋納専用施設をもつ古墳は、決して船原古墳だけではない。今回管見に挙がったものでも、船原古墳を含め列島内で22例がある。

遺物埋納専用施設については、形態ごとに主体部に対する遺物格納用施設や、主墳に対する倉庫的な施設といった評価はあるが体系的な分析・検討はない。今回集成した22例の内、検出状況で船原古墳1号土坑に最も近しいのは、和歌山県丸山古墳(5世紀前半)である。丸山古墳では墳丘裾部の埴輪列の下から、大刀・鉄斧・鉄鏃等の上に鉄鋌を敷き、その上に鉄鉢を2つ一組で重ね並べ、鉄鉢に板石で蓋をした状態で遺物が検出された。しかし、発見が古く、十分な記録・報告がないため詳細は不明である。また時期という点では、船原古墳(6世紀末～7世紀初頭)と大きな差がある。時期的に最も近いのは、茨城県風返稲荷山古墳で、木箱への馬具埋納という点でも類似する。しかし、この馬具を納めた木箱は、隣接するくびれ部石棺に埋葬された、推古朝前後に壬生部・若舎人部等に編成された首長の子弟と想定される人物に対する副葬品で、船原古墳の土坑群とは性格が異なる。

同じ遺物埋納専用施設でも船原古墳土坑群に近似する例は見られず、やはり特異な遺構である。今後は半島・大陸に類例を求めつつ、さらに埋納された遺物の様相・性格を解明することで、船原古墳の土坑群の意味を見出す必要がある。(今回、紙幅の関係から、参考文献・報告書は割愛した。ご了承願いたい。)

2019年11月30日（土）　古賀市リーパスプラザこが交流館　多目的ホール　15：00～16：00

「船原古墳１号土坑から出土した馬具と馬装復元の課題 —鉛ガラス雲珠・辻金具と遣隋使の開始－」

桃崎祐輔（福岡大学人文学部）

Ⅰ　はじめに

船原古墳１号土坑から出土した馬具には新羅製と国産の両方が含まれていると考えられる。新羅製と考えられるＡセットの雲珠・辻金具に嵌め込まれている白い物体を分析したところ、イモガイの成分であるCa(カルシウム)ではなく、Si（珪素）とPb(鉛)が検出され、鉛ガラス製とわかった。ところが『隋書』には、中国では隋代まで鉛ガラスの生産は途絶え、北インドのソグド人とみられる何稠という職人が、「緑瓷」（緑釉）を用いて瑠璃（ガラス）を復活させたという記事がある。この記事を裏付けるように、陝西省西安市の韓林寨呂武墓（592年葬）では、ササン朝ペルシアの杯を中国で真似た鉛ガラス高脚杯が出土した。すると船原古墳の新羅製馬具は、隋から新羅に原料ガラスが輸出されたか、隋から新羅に鉛ガラスの生産技術が伝わらなければ作れない。また鉛ガラスが復活した年代も、隋が成立した581年から、592年の間に絞れるから、船原古墳１号土坑の年代も、590年頃よりも古くできない。本講演では、船原古墳の馬具から、朝鮮三国・倭国の遣隋使開始の問題との関わりを考えてみたい。

Ⅱ　2019年10月段階での推定馬具セット

2019年３月31日に刊行された『船原古墳Ⅱ－１号土坑出土遺物概要報告編—』（福岡県古賀市文化財調査報告書　第73集）によれば、船原古墳の手前から検出された１号土坑（Ｌ字形遺物埋納土坑）の内容物は、現状で鐙が７セット、鞍が５セット、馬冑１、小札甲１、蛇行状鉄器３、轡頭絡６セット、尻繋６セット前後が存在する。暫定的に以下の７セットを想定するが、調査の進展で訂正していく必要がある。

Aセット	金銅装二条線引手付忍冬文鏡板付轡１＋鉛ガラス嵌入金銅製辻金具９（頭絡６？、尻繋３）＋鉄地金銅張覆輪付鞍１＋大型鉄製杓子形壺鐙一対２＋鉛ガラス嵌入金銅製雲珠１＋心葉形双鳳凰文杏葉３＋障泥金具３
Bセット	花形鏡板付轡＋宝珠付鉢形辻金具５＋宝珠付多脚式雲珠１＋花形杏葉３＋兵庫鎖付三角錘形壺鐙＋二脚鋲状金具付木製鞍一具１点＋蛇行状鉄器？
Cセット	立聞鉸具車輪文鏡板付轡＋鞍＋木製壺鐙
Dセット	円形半球形隆起付鏡板付轡＋鞍＋木製壺鐙＋六角形雲珠？＋心葉形三葉文杏葉？＋蛇行状鉄器？
Eセット	立聞鉸具素環轡＋鞍＋木製壺鐙＋大型鋳銅鈴？
Fセット	素環轡＋鞍＋木製壺鐙＋鉄製棘葉形杏葉10＋大型鋳銅鈴？
Gセット	鉄製馬冑＋（革製馬甲？）＋鞍＋木製壺鐙＋蛇行状鉄器

Ⅲ　馬具の検討

１　Aセット（金銅製二条線引手付鏡板付轡一対＋双鳳凰文杏葉３＋ガラス製辻金具８＋ガラス製雲珠１＋鉄地金銅張鞍金具１＋鉄製壺鐙２＋障泥金具３）

（１）金銅製二条線引手付心葉形十字文唐草文透鏡板付轡：この種の金銅製忍冬文透鏡板付轡は、国産品か、舶載品かはまだ未確定だが、韓国昌寧末吃里遺跡で新羅末期のデポから同種鏡板の縁金具が出土し、新羅製の可能性が高まっている。古墳時代飾馬具の中で最も精巧かつ豪華なグループで、引手は少数の金銅製と多数の鉄製の両方がある。特に金銅製のものは藤ノ木古墳・宮地嶽古墳（いずれも国宝）御子谷原・古柳塚古墳（重文）など４例しかなく、船原の馬具が国宝級と評価される由縁である。八女市乗場古墳、宗像市沖ノ島、穂波町西ノ浦上13・14号横穴、行橋市福島家蔵品、福津市宮地嶽古墳、伝津屋崎町出土品、福岡市金隈尾崎山（今里不動古墳出土品？）、大分県別府市太郎塚、佐賀県小城町一本松１号墳、唐津市鏡山２号、長崎県壱岐勝本町笹塚、熊本県免田町才園２号、菊水町江田穴観音など、本例も含めれば福岡県の９セット以上を筆頭に北部九州に15例が集中し、しかも型式学的に新相を示すものが多い（桃崎2002）。このため千賀久氏は新しい型式は九州で製作された可能性を指摘した（千賀2003）。

船原古墳Aセットのような心葉形十字文唐草文透彫鏡板の研究は古く後藤守一氏により着手された。

岡安光彦氏は藤ノ木古墳出土馬具に刺激を受け、心葉形鏡板・杏葉を編年（1988、1989）した。『斑鳩藤ノ木古墳』報告書では、珠城山３号墳・藤ノ木にＴＫ43型式の須恵器を伴う点から、６世紀後半とした（千賀久・鹿野吉則1990）。

小野山節氏は『馬具大鑑』で、藤ノ木を６世紀中頃～末とし、中国北朝産であろうとした（小野山1990）。

玉城一枝氏は、パルメット意匠の馬具の多くは中国・朝鮮文化圏からの将来品と考えた（玉城1996）。

千賀久氏は、藤ノ木セットのような鏡板の外側で二条線引手を伴う心葉形鏡板・杏葉類を新羅系とした。さらに薄肉

彫り品（a 類）・透彫り品（b類）に大別し、b類を縁金に鋲を密に巡らすものとその模倣品（b１類）、縁金の要所にのみ鋲を使用するもの（b２類）に細分する。優品が多いa・b類の金銅製馬具は舶載品、b１・２類の鉄地金銅張馬具はその模倣品で、出土例が集中する北部九州での模倣生産も想定した（千賀 2003）。

桃﨑は、飛鳥池遺跡のような倭の工房で、新羅・百済・高句麗など、外来工人を中核とする国際的なプロジェクトチームがつくられ、中国系モチーフの情報も加味して藤ノ木Aセットが製作された可能性を指摘した（桃﨑祐輔 2003）。しかしその後、韓国昌寧末屹里遺跡の寺院跡窖蔵遺構より心葉形十字文鏡板の縁金が出土したことを重視してa・b１類の金銅製馬具についての国産説を撤回、「新羅の調」として舶載されたとの考えに傾いた（桃﨑 2016 ほか）。

しかし一方、諫早直人氏のように、藤ノ木のような馬具は、朝鮮半島内の製作技法が看取されるものの、異なる地域間の要素が複合するため製作地を特定地域に限定することは難しく、日本列島に渡来した複数地域出身の工人が協業して製作した可能性も依然として高いとして、桃﨑の軌道修正を批判した（諫早直人 2013）。

船原古墳Aセットや、これに酷似する奈良県珠城山３号墳・奈良県藤ノ木・伊勢神宮徴古館所蔵品・静岡県御小屋原古墳・岐阜県ふな塚出土品・福岡県金隈例などは、動植物の立体表現に彫崩技法を駆使し、さらに毛彫で線彫りを加飾して精緻な表現を追求したa類古相に属するのに対し、賤機山古墳例は、流麗な彫り崩しと打ち出しを併用し、毛彫と列点表現を併用し、古相の作品に比べると若干省略表現がみられる。また福津市宮地嶽古墳、別府市次郎塚古墳は、唐草文に彫り崩し技法を用いる点は千賀分類のa類だが、毛彫の加飾がない点は新相を示す。

以上、同種の心葉形十字文透唐草文轡＋心葉形透彫杏葉のセットは、30 例弱知られているものの、引手が金銅製のものは極めて少なく、管見の範囲ではA１類の斑鳩藤ノ木古墳（国宝）・福津市宮地嶽古墳（国宝）・静岡県牧ノ原市御子屋原古墳（東京国立博物館蔵品）、B１類の山梨県東八代郡八代町古柳塚古墳など４例を数えるにすぎない。

なお御子屋原の杏葉は、京都大学蔵の福岡市博多区金隈尾崎山出土杏葉とよく似ているため、金隈杏葉も金銅製の引手を持つ鏡板轡を伴っていた可能性が高い。京都大学所蔵の福岡市金隈伝尾崎山出土杏葉（A１a類）は極めて精巧な造りだが出土古墳は不明である。金隈付近でこの種の馬具を出土しうる有力首長墳は、福岡平野最大の横穴式石室を内蔵する今里不動古墳（径 39mの円墳）とみられ、７世紀前半～中葉の那津官家管掌者の墳墓の可能性が高い。

金銅製引手からいえば、重要文化財の壱岐笹塚古墳（B２類）、筑紫君墓である八女市乗場古墳の鉄製引手の轡（B１類）より上位と想定され、那津官家の管掌者の今里不動古墳や、宗像君である宮地嶽古墳などに近い地位が想定される。

（２）双鳳凰文杏葉：心葉形双鳳凰文杏葉は心葉形の鉄地に、金銅板、透彫りの薄板を重ね、厚い縁板を多数の笠鋲で留める。薄板は中央の下端部に三葉形を置き、左右に対称的に向き合う鳳凰文を配した図柄を透彫りし、さらに精緻な線刻で文様を描き起こした優品である。この双鳳凰文杏葉は、心葉形の外向きである奈良県珠城山３号墳と同じ文様構成をとるが、鋲数が僅かに少ない点で後続するとみられ、鏡板の唐草の構成も異なっている。類品としては、鳳凰が内向きに表現され、鳳凰の羽毛が芭蕉の葉のように奔放で写実的な増田太郎氏蔵品、緻密で幾何学的表現に優れるが、鳳凰が水鳥のように退化しているふな塚B、精緻だが鳳凰の表現が戯画的でやや平板な印象をうける伊勢神宮徴古館蔵品、棘葉形でやはり戯画的な鳳凰を内向に表現する藤ノ木古墳などと対比される。

（３）鉛ガラス象嵌イモガイ模倣辻金具・雲珠：2016 年１月 28 日、古賀市教育委員会は 2013 年に船原古墳埋納坑から出土した金銅製馬具のうち、９ 点にガラスの装飾が施されていたと発表した。ガラスの装飾は、馬の頭部や尻部につける革ベルトが交わる部分に付ける「辻金具」８点と鞍後方の尻繋に付ける「雲珠」の計９点で、いずれもガラス部分は直径 4.5 ㎝のドーム状だった。出土当初は風化のため白く変色しており南島産の大形イモガイ製品とみられていたが、異常に重量が重く、ドーム状に盛り上がり、裏側に金属製鉢の裏打ちがあるなど特殊で、ヤコウガイの蓋かとも考えた。その後、熊本大学の木下尚子教授が本資料を観察し、貝製品ではなく、ガラス製品ではないかと指摘した。九州歴史資料館の加藤和歳氏らが 2015 年に蛍光Ｘ線分析したところ、鉛と珪素が検出され、貝殻の主成分であるカルシウムが検出されなかったため、「鉛ガラス」製品と判明した。ガラスは補強のため半球形の銅製品で裏打ちされ、金銅製の本体に取り付けられていた。風化で白く変色する以前のガラスの色調はまだ不明だが、古賀市に隣接する同県福津市の宮地嶽古墳から板状の鉛ガラスが見つかったほか、同時期の国内の鉛ガラス製品の出土例を踏まえ、同館は緑色の可能性が高いとみている。馬具にガラス装飾があるのは斑鳩藤ノ木古墳の鞍の把手の例がある。

中国内蒙古自治区六家子鮮卑墓では、４世紀前半の鮮卑墓で、金製装身具や金銅製帯金具とともに、ガラス製の辻金具が出土している。韓国慶州の皇南大塚（５世紀中葉）や金冠塚（５世紀後半）、鶏林路 14 号墳（６世紀前半～中葉）、高霊大伽耶の池山洞 44 号墳（５世紀末～６世紀初頭）、などで同様の装飾が見つかっており、新羅製品と考えられる。

以上、船原古墳遺物埋納壙Aセットのガラス製辻金具は８点、雲珠は１点と確定したが、

Ａ：両頬・両こめかみ・額中央に辻金具を配し、頭絡だけで５～６個使い、尻繋に雲珠１、辻金具２～３個を使った。

Ｂ：頭絡に２～４個、尻繋に雲珠１、辻金具４～６個使用し、頭絡・尻繋が重ねて置かれていた。

鞍に接して出土していることからすれば、Ａ・Ｂいずれの可能性も考えられ、更に検討を有する。

（４）大型鉄製杓子形壺鐙：杓子形の壺部に長方形の柄がつく。現状では全鉄製のように見える。金属製壺鐙は、齋藤弘 1986「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』第２号の段階では、23 例が知られていたが、静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『原分古墳』の段階の集成では 44 例が知られている。うち全鉄製壺鐙は 40 例くらいだと思われる。

山梨県古柳塚古墳では、心葉形十字文忍冬文透鏡板付轡と鉄製壺鐙のセットが出土しているが、壺鐙は踏込部にスリッパの底板状の突出があり船原古墳より新しい。

なお埼玉県東松山市古凍14号墳では、鉄製壺鐙を含む馬具一式を装着した殉葬馬土坑３基が検出されている。

３　Ｂセット：花形鏡板付轡＋四脚辻金具４以上＋多脚式雲珠１＋花形杏葉３＋兵庫鎖付三角錘形壺鐙＋二脚鋲状金具付木製鞍一具１点＋蛇行状鉄器？

（１）花形鏡板・花形杏葉：花形鏡板・杏葉は朝鮮半島や中国に存在せず、日本製と考えられる馬具セットである。桃﨑分類のＢ類で、珠文を均等に配置し、立聞下に三角形の区画がある点から福岡市西区元岡石ヶ元１号墳の出土品に先行し、最古型式の群馬県伊勢崎市稲荷山に後続するごく初期の型式の可能性が高い。また鏡板と杏葉が同形態の、所謂「ともづくり」である点も古い特徴といえる。600年前後の製作となろう。

（２）二脚鋲状金具：花形鏡板・杏葉のセットにしばしば共伴して出土する。群馬県八幡観音塚・千葉県金鈴塚・岡山県定東塚古墳などに二脚鋲状金具とのセット関係が確認できるため、Ｃセットに帰属すると考えられる。

４　Ｃセット：立聞鉸具車輪文鏡板付轡＋鞍＋木製壺鐙

（１）立聞鉸具車輪文鏡板付轡：立聞に鉸具がつく車輪文の鉄製鏡板轡と考えられる。日本列島の車輪文・斜格子文鏡板付轡の祖形である可能性が考えられる。注目されるのは、銜外環の基部の鏡板内側に接する部分が一体構造の銜留構造をなし、バイオリンのようにくびれる特異な平面系を呈する点にある。同様な馬具は極めて希少で、高句麗五女山城JC窖蔵・伝好太王付近出土品・平壌大城市山城井戸・静岡県掛川市宇洞ケ谷洞窟などしか知られておらず、前者３例の出土地が示すように明らかに高句麗系である。和歌山県鳴滝１号墳や千葉県金鈴塚古墳などで、立聞鉸具大形素環鏡板付轡＋斜格子文杏葉のセットが出土しており、このバリエーションであると考えれば国産品と推定される。セットとなる杏葉は不明だが、心葉形三葉文杏葉の可能性がある。

２　Ｄセット：円形半球形隆起付鏡板付轡＋鞍＋木製壺鐙＋六角形雲珠？＋心葉形三葉文杏葉？＋蛇行状鉄器？

（１）円盤形鏡板付轡：蛇行状鉄器に錆着していた馬具は、Ｘ線ＣＴスキャンでの解析および肉眼観察の結果、円盤形鏡板付轡と花形鏡板・杏葉のセットであった。このうち円盤形鏡板付轡は円板状で中央部に縦方向？の銜通孔があるもので、表面には半球形の打ち出しがある。これまで見つかったことのない珍しい型式で、舶載品の可能性がある。

（２）六角形透彫歩容付雲珠：正六角形の金銅板の中央に菊弁状の半球形隆起を設け、そこに大形の歩揺付立飾を立てる。六角形のコーナー部にも小型の歩揺をそれぞれ立てており、残りの空間に風車のようなスパイラル状の透彫を施している。金銅板のへりには２個ずつ小さいかがり穴があけられており、革や布の上に綴じ付けられていた。

この装飾金具はどの馬具とセットをなすのか現状では判断できないが、日本製の馬具に多い鉢形多脚の雲珠と基本的な構造が異なるため、舶載品の可能性があり、現時点では円形半球形隆起付鏡板付轡とセットと判断しておく。

また類似するパーツがほかにもあり、正六角形という幾何学的な形状からも、複数連結して使用した可能性がある。また小型の歩揺付雲珠類が無数に出土しており、これらともセットである可能性があり、現状ではどのような使用をしたのかまだわからない。複数セットであれば、顔面の額を飾る「当廬」の可能性は低くなり、馬の尻上を飾る雲珠の可能性が高い。群馬県綿貫観音山古墳や藤ノ木古墳などとの比較検討を参考に復元を進める必要がある。

（３）心葉形三葉文杏葉：小形の心葉形杏葉で、内部に二股の三葉文を表現する。国内では類例がなく、舶載品の可能性がある。舶載の可能性が高い円盤形鏡板付轡とセットである可能性が考えられる。

５　Ｅセット：立聞鉸具素環鏡板付轡＋鞍＋木製壺鐙＋鉄製棘葉形杏葉10＋大型鋳銅鈴？

（１）立聞鉸具素環鏡板付轡：帆立貝形の鏡板に銜と引手がつく通常の素環鏡板付轡と思われたが、その後のＸ線解析とクリーニングの進展で、長方形立聞の基部に穿孔し、ここに短い刺金をからめる鉸具構造になっていると推定できた。さきの立聞鉸具車輪文鏡板付轡の存在とあわせ、通常の素環轡ではなく、TK209～TK217期に全国に拡散する小型の立聞鉸具素環轡のプロトタイプである可能性が高いと考えられる。とはいえ７世紀代の立聞鉸具轡とは全く形状や法量が異なり、型式学的には懸隔がある。岡安光彦氏の「鉸具造立聞系環状鏡板付轡　編年早見表」（岡安光彦1990）にその後の宮代栄一氏の検討も加味すれば、立聞鉸具素環鏡板付轡は、和歌山県鳴滝１号墳→千葉県金鈴塚古墳→山梨県天神のこし古墳→湯舟坂２号墳→山梨県双葉２号墳→山梨県八代無銘墳→山梨県寺の前古墳Ｂ轡という変化過程をたどることができるとされるが、船原遺物埋納坑出土品は、これらと方形立聞付素環鏡板付轡をつなぐものとして評価される。立聞鉸具素環鏡板付轡の馬装との比較を踏まえれば、鉄製か、イモガイ嵌入の簡素な辻金具や、木製の三角錘形壺鐙、金属パーツの少ない鞍と組み合う実用的な乗用馬具であると考えられる。

（２）鉄製棘葉形杏葉：鉄製棘葉形杏葉が10枚、土坑のＬ字形拡張部分で出土している。ＣＴスキャンの解析の限りでは、地板しか認められず、通常組み合わさる金銅装の文様板があるようには見えない。革や布、木の文様板を伴う可能性があるのか、今後検討が必要である。棘葉形杏葉のうち、茨城県風返稲荷山古墳や愛知県豊橋市馬越長火塚古墳では、素環轡と組み合う可能性が指摘されており、本例もその可能性が考えられる。輪郭は法隆寺伝世の金銅透彫金具や毛彫馬具に近いが、それ以前に新羅の楼岩里型帯金具に近い。

６　Ｆセット：方形立聞付素環鏡板付轡＋鞍＋木製壺鐙

（１）素環鏡板付轡：帆立貝形の鏡板に銜と引手がつく通常の素環鏡板付轡と考えられる。

７　Ｇセット：鉄製馬冑＋鞍＋木製壺鐙＋蛇行状鉄器

鉄製馬冑と革製馬甲のセットが存在する可能性があり、この場合は蛇行状鉄器とセットであろう。また轡が６点であるのに対し鐙が７対存在するので、１点は馬冑と組み合うと考えた。

（１）馬冑：2016 年 10 月 28 日の記者会見で、九州歴史資料館の小林啓氏の観察によれば、上下さかさまの状態で出土し、さび落としと接合の結果、95%まで復元された。また表面にはスギ材の木質が付着しており、箱の底板と推定された。スギは日本特産であり、日本製の箱に入っていたということになる。

日本列島では現在、和歌山県和歌山市大谷古墳で馬冑・馬甲（５世紀末）、滋賀県野洲町甲山古墳で馬甲（６世紀中葉～後半）、埼玉県埼玉将軍山古墳で馬冑（６世紀後半～末）の例があり、僅か３例に過ぎない。よって船原古墳例が馬冑であれば、日本で３～４例目、馬甲が存在した場合を含めても４～５例目というきわめて貴重なものとなる。

中国では、遼寧省朝陽市周辺の十二台営子 88M１墓、喇嘛洞ＩＭ５号墓、ＩM17 号墓で馬冑・馬甲のセットが見つかった。また 414 年に没した北燕馮素弗の墓（北票県西官営子１号墓）でも、馬甲用の大型鉄札が出土した。

太田博之氏は、中国・朝鮮半島の馬冑関連資料を包括的に集成し、日本列島・朝鮮半島の馬冑には複数の系統が存在し、眉間板を分割成形する福泉洞 10 号系統、１枚の矧板を用いる玉田Ｍ３号系統は新旧関係ではなく、並存していたことを明らかにしたが、埼玉将軍山馬冑の製作年代については、5 世紀後半から６世紀まで含みを残した（太田 1994）。なお馬具一般では、６世紀前半～中葉に鋲数がピークに達する。その後、釜山市杜谷８号墳や金海大成洞１号墓では、高句麗製ないしその初期の模倣品と思われる分割成形方式の馬冑が見つかり、５世紀初頭のものと見られている。

公山城（大韓民国忠清南道公州市）では百済時代の貯水施設内から唐貞観十九年（645）の漆書銘のある革製札甲一領分が出土したが、更にその下層から漆塗革製の馬甲１領分と装飾大刀２口が出土した。装飾大刀は日本では７世紀後半の古墳から出る円頭大刀に似て、刀身は両関、カマス鋒、うち一振には山形金様の佩用金具がみえる。

公山城内村落遺跡（公山城北部の錦江に面した平地）は百済時代以降の遺跡で、百済時代の木造建築跡や貯水施設があり、百済時代の層から鉄鏃が出土し、戦闘のあった可能性が過去の調査団の発表で指摘されている。百済滅亡（660）に際しては、扶余から熊津に逃れた義慈王は大勢の不利を悟って唐軍に降伏し、おそらく公山城は無血開城したと想像される。しかし、唐はその後、百済の故地に熊津都督府を設置するが、新羅の攻撃で 676 年に陥落し、唐は半島から撤兵した。公山城の陥落はこの際の新羅軍の攻撃によるもので、今回出土した甲冑や馬具は、唐軍やそこに編入されていた百済軍が使用した可能性がある（穴沢咏光先生の御教示による）。

2016 年８月 19･20 日、韓国釜山広域市東亜大学で開催された嶺南考古学会・九州考古学会第 12 回合同考古学大会で、小林啓・加藤和歳・岩橋由季・甲斐孝司・森下靖士氏が「船原古墳遺物埋納坑出土馬冑の科学的調査」と題し発表した。

大谷古墳の馬冑は、共伴した馬具や馬鈴などの検討から大伽耶製の可能性が高く、100 年ほどの時期差がある船原古墳（７世紀初頭）の段階ではすでに大伽耶は新羅に併呑されている点が問題となる。朴天秀氏は、伝世品ではないかと述べていた。しかし百済公山城で、７世紀代のものと考えられる馬冑や馬甲が出土しており、報告書に公開された写真を見る限りは、船原に最も近いとの印象を受ける。馬冑や馬甲の詳細が正式報告されるのを待ちたい。

８　蛇行状鉄器―寄生の検討

船原遺物埋納土坑では、３点もの蛇行状鉄器が出土した。舶載品と考えれば、Ａ・Ｃ・Ｄセットと組み合うことになるが、Ａセットに組み合うかどうかは、鉄地金銅張鞍覆輪に擦れた跡があるかどうかを検討する必要がある。

他の例からして国産馬具と組み合う可能性も考えられる。全国で最多であることはもちろん重要だが、うち１点は、円盤型鏡板付轡や花形鏡板付轡・花形杏葉が銹付いていたため、馬冑・馬甲のような甲騎具装に伴うだけでなく、通常の装飾馬具と組み合わせて使われた可能性がある。現時点ではＢ・Ｄ・Ｇセットと組み合うと判断しておく。

馬の尻上を飾る装具を「寄生」と呼び、中国五胡十六国・南北朝時代の絵画・彫刻資料が多く知られており、雲南省昭通県后海子の霍承嗣墓には馬甲・寄生の壁画があり、東晋代の４世紀後半に遡るとみられている。実物では、中国遼寧省喇嘛洞墳墓群西端部から金銅透彫鞍とともに出土した金銅製寄生が４世紀末から５世紀前半とされる。扇形をした金属部に有機質の素材を植え付けていたとみられ、箒のような構造をしている。同様な構造の金銅寄生は新羅慶州皇南大塚南墳・金冠塚・天馬塚など、新羅の王陵や王族陵の出土品にも受け継がれている。楊弘氏は、寄生はもともと馬の尻に樹枝状のものを立てて背後からの弓矢の攻撃にそなえた防御具であると指摘している。

なお北燕馮素弗墓（415）では、蛇行状鉄器とは異なるが、馬の尻上に装着した旗指物台の鉄製品が出土している。基底部が樹枝状の平坦面をなしているため、馬尻を箱状に覆う馬甲の平坦面上に取り付けられたと推定される。

高句麗では安岳３号墳（357）、双楹塚の壁画に旗指物の表現があるが、船原古墳のような、端部の逆Ｕ字形の金具で鞍の居木を挟むかたちで装着し、後輪を跨ぎ後方に伸びる波形の鉄棒構造の表現は、高句麗国内城時代（３世紀末～427）の通溝 12 号墳の壁画で初めて出現し、その年代は４世紀末頃とされるが、古墳出土の実例は知られていない。しかし近年、北朝鮮国境に近い韓国イムジン川流域のヨンチョンのムドリ２号堡塁で、挂甲や蛇行状鉄器が出土した。

朝鮮半島南部で最も古いのは、慶州金冠塚や咸陽上柏里古墳のもので、５世紀後半に遡る。晋州の玉峯７号墳、水精

峯２号墳は大伽耶滅亡（562）直前頃の古墳であるため、埼玉将軍山の遺物群を大伽耶滅亡前後の朝鮮半島状勢と関連づけた塚田良道氏の指摘が思い起こされる。日本では埼玉将軍山、福岡県福間町手光南２号墳、福岡県大井三倉５号墳、山口県防府市塔ノ尾古墳、奈良県団栗山古墳、奈良県飛鳥寺塔心礎納入品などの例がある。

桃崎が埼玉県本庄市の太田博之氏とお話した折、蛇行状鉄器は、鞍の居木にU字形の部分をはさみ、蛇行部分が鞍の後輪をまたいで安定をとり、その先に旗竿がつく構造であることを教えていただいた。この話を東京国立博物館の白井克也氏にしたところ、白井氏はその場で収蔵品の韓国梁山夫婦塚の鞍と蛇行状鉄器を出してこられたので、それを合わせて確かめたところ、ぴたりと一致し、蛇行状鉄器の使用法がはっきりした。この成果を白井氏が 2007 年の論文に書き、「後輪掛留式」と呼称した。この成果をもとに装着状況が復元できるようになった（白井克也 2007）。

埼玉将軍山古墳では、２点の蛇行状鉄器が出土している。将軍山には馬冑も出土しており、セットで用いられたと考えられるが、李尚律氏は馬冑は２点分の破片である可能性があるとしている。同じ行田市内の酒巻 14 号墳では、素環鏡板付轡、胸繋に馬鈴、後輪垂直鞍・障泥およびソケット状の受けをもつ蛇行状鉄器と、これに挿し込まれていた旗指物を表現した馬埴輪が出土しており、埼玉将軍山の馬装を目撃して製作した可能性も考えられる。

飛鳥寺塔心礎納入品（593 年納入）でも小札甲と蛇行状鉄器２点が埋納されており、587 年の蘇我物部戦争で物部守屋を滅ぼした蘇我馬子や聖徳太子が小札甲とともに奉献した可能性がある。一方、593 年塔心礎への舎利納入の際、パレードで先導を勤めた馬に装着していた可能性もある。船原は馬冑・挂甲を伴う点は埼玉将軍山・飛鳥寺塔心礎に近い。

9　大型鋳造鈴

６世紀中葉以降、多角形で 10cm 超の大型鋳造多角形鈴が散見される。八角形で高さ 10 cm前後の規格品は全国に 20 点弱が分布し、古代の山辺道沿いにあたる奈良県天理市柳本町で、大型多角形鈴と、中型球状鈴が共伴し、この種の銅鈴の分布中枢が、畿内にあることを窺わせる。倭王権の中枢部で製作され、全国に配布されたと考えられる。

船原古墳の遺物埋納坑にも７cmを越える大型鋳造鈴が６点含まれており、扁平なものと球状に近い多角形をまじえている。当地は糟屋郡席打駅の推定地にも近い。よってこれら大型鋳造鈴は、プレ駅鈴のようなものではないかと考える。

なお『日本書紀』には、崇峻天皇暗殺（592）の報は筑紫に駐屯する征新羅軍に駅馬によって伝えられたとされ、やはり征新羅軍を率いていた来目皇子死去（603）の報も、駅使によって大和まで伝わったと書かれている。時期的に接近する船原古墳１号埋納土坑で２点出土した大型鋳造鈴の性格を考える上で重大な示唆を与える。すなわち征新羅軍の発動は畿内と九州の頻繁かつ迅速な往来を必要としたため、７世紀中葉に制度化される駅使の前身となる仕組がこの時整えられたことが考えられる。なおこの直後にあたる 608 年、隋の裴世清が来日した際には、通過点となった筑前や山陽道が整備された可能性が高いと考えられ、隋使の到来を告げる伝令も発せられたと考えられる。

福岡市西区元岡Ｇ６号墳では、初葬に庚寅銘大刀が供えられていたことで知られるが、最終埋葬が終わった７世紀中頃に、石室外の閉塞石の上に大型多角形鈴が供えられていた。皇極紀元年（642）春正月に百済の使人、大仁安曇連比羅夫が筑紫国より驛馬に乗って来たとある。大化二年（646）条には、駅馬・伝馬の設置や、鈴の記事があり、７世紀中葉の元岡Ｇ６号墳の銅鈴は、初期の駅鈴である可能性が十分にある。

壬申の乱（672）では、東国へ出発した大海人皇子が、駅鈴の使用を申請したが許されなかった。古代の駅鈴の実物は、隠岐・玉若酢命神社に二個伝世し、高さ約 6.5cm、幅約 5.5cm の大型鈴だが、真贋両説がある。

10　中型鋳造鈴

船原古墳では径７cm超の大型鋳造鈴が６点、径４～５cmの中型鋳造鈴が８点も出土した。高さ９cmを下回る中型多角形鋳造鈴は宮崎県から福島県までの全国34カ所で出土しているが、うち19カ所が九州、うち16例が福岡県に集中する。

白木原宜氏（白木原 1997）によれば、一元生産と配布が想定される鋳銅製馬具のうち、八角鈴に限っては、紐と本体を別造し、紐と鈴口の方向が直交する特異な製作痕跡を持つ一群が、宗像市大穂町口４号墳、岡垣町野間古墳群、福津市津丸横尾３号墳など宗像を中心とした玄界灘沿岸地域に偏在するため、地域生産の可能性を指摘する（白木原 2002）。

同様の鈴は島根県上塩冶築山古墳、長野県新井原古墳、静岡県賤機山古墳、千葉県木更津市鶴巻塚古墳の例がある。

なお馬淵和夫氏によれば、上塩冶築山古墳の６点の多角形鈴は、鉛同位体の分析より、日本列島産の銅が使用された可能性が指摘されている。福岡県田川郡香春岳採銅所では、奈良・平安時代に銅が採掘されていた。福岡市西区桑原・元岡遺跡群では、鋳銅鈴や馬鐸も出土し、北部九州で在地の銅を用いて多角形鈴が製作されていた可能性が考えられる。

Ⅳ　考察

1　船原２号土坑の素環轡群と、殺馬儀礼の可能性

船原古墳２号土坑（長軸 4.58m×1.95m×深さ 0.8m）は長方形で、上面の１層（黒褐色土層）からは人為的に叩き割られた大量の須恵器の大甕片、瓮片、土師器の高杯片が折り重なって出土した。この下を掘り下げたところ、人為的に埋め戻された土層の下部から、環状鏡板付轡４点、これにつながっていた革紐か布帯の痕跡が粘土質の帯となって見つかっている。床面に堆積した 19 層（砂層）は、リン・カルシウム分析の結果、局地的なリンの集中から、骨などが埋まっていた可能性が考えられた。ここで考えられるのは、実用的な馬具を装着した馬を殺し、その肉を共食し、酒宴に用いた土器を破砕供献した可能性である。

2　飛鳥寺塔心礎との関係

船原１号土坑の特異な埋納状況については、挂甲・蛇行状鉄器・馬鈴・杏葉？などを伴う飛鳥寺塔心礎の遺物納入と共通点が多い。大橋一章氏によれば、飛鳥寺の仏舎利納置について、『日本書紀』推古天皇元年（593）正月の条には至って簡略な記事しかないのに対し、12 世紀頃に成立した『扶桑略記』には、「刹柱を立つる日、嶋大臣ならびに百余人みな百済服を着す。観る者ことごとく悦ぶ。仏舎利を以って刹柱の礎の中に籠め置く」と見え、更に鎌倉時代の『上宮太子拾遺記』は「本元興寺縁起」を引用して、正月十五日に馬子の宅から仏舎利を送って心礎の中に安置し、翌日刹柱を立てたあと、仏教法会のため外来音楽と種々の飾りが用意され、天子の車である輅四両と荘馬 500 頭のパレードが厳粛に行われ、「馬旗五百竿」が立てられ、華麗さ荘厳さは筆舌に尽くせぬ程で、参列者も数え切れず、馬子以下 100 名はみな弁髪にして百済服を着ていたが、観る者みな抗す－心理的抵抗を感じたと記している(大橋一章 1997)。

なお飛鳥寺塔心礎遺物群は、諫早直人氏によって再整理と検討が進められている（諫早直人 2015)。船原と比較した場合、①船原は蛇行状鉄器３点だが、飛鳥寺は２点。②船原は挂甲１領だが、飛鳥寺は挂甲２領、③飛鳥寺は鋳造虎頭鈴だが、船原は鋳造多角形鈴と鍛造楕円形鈴、④船原は馬具が複数の土坑から 10 セット前後出土しているが、飛鳥寺は馬具の可能性がある装飾品が若干で、轡・鞍・鐙はない。⑤船原は馬冑があるが飛鳥寺にはない、などの相違がある。

多角形鈴を大量に保有する船原は、飛鳥寺塔心礎よりも新しい、西暦 600 年前後以降に埋納された可能性が高い。

3　新羅の調、任那の調

『前方後円墳集成』編年 10 期前半（ＭＴ85～ＴＫ43 型式期）は、古墳時代を通じて朝鮮半島系副葬品が最も濃密に認められる舶載品集中期であるとして、内山敏行氏はこれを「舶載品ラッシュ」と呼んだ（内山敏行 2003)。本論との関わりでは奈良県藤ノ木古墳、熊本県才園古墳、福岡県沖ノ島７号遺跡、愛知県熱田神宮蔵品、静岡県賤機山古墳、群馬県綿貫観音山古墳、群馬県八幡観音塚古墳などもその例に挙げている。

山尾幸久氏の研究で、新羅が大伽耶を併合する 562 年の直前にあたる 560 年頃から開始され、新羅が対唐外交を背景に倭国への形式的服属からの離脱をはかる 622 年頃から下火となり、646 年に停止することを指摘した(山尾幸久 1989)。これを踏まえ、６世紀後半に倭と新羅の正式な国交を通じて藤ノ木古墳のような新羅系馬具の優品がもたらされたという見解が朴天秀氏（朴天秀 2009）や土生田純之（土生田純之 2010）によって示された。

桃崎も新羅系の忍冬文・鳳凰文・龍文・唐草文等の馬具類のうち、確実な舶載品は、「新羅の調」「任那の調」として舶載されたものであると考え、船原古墳の遺物埋納土坑で出土した忍冬文・鳳凰文系の馬具も「新羅の調」と考える。

ここで宮地嶽古墳出土遺物のうち、馬具とともに出土した緑色ガラス板に注目したい。小田富士雄氏は、百済の益山弥勒寺東塔跡付近で出土した「緑釉塊」が本来緑色鉛ガラス板であること、西塔西側畑地からも同様な遺物が出土していたことをつきとめ、当寺で７世紀前半代の緑釉垂木先瓦が出土していることなどを根拠に、７世紀前半の弥勒寺創建期の所産である可能性を指摘し、宮地嶽古墳のガラス板も７世紀の所産と考えた（小田富士雄 1980)。近年、弥勒寺西塔が解体調査され、舎利孔から金製舎利容壺、各種奉納品とともに一辺 23 ㎝の緑色ガラス板が出土した。共伴した金製奉安記には、193 文字の銘文があり、百済王后の発願で弥勒寺伽藍を創建した後の己亥年（639）に舎利を奉安した旨を記す。なお弥勒寺の伽藍部では７世紀代の干支銘印瓦が 166 点も出土し、武王在位期間中の「丁亥年」（627）と「己丑年」(629) が最も多く合計で 128 点にも達するため、ガラス板は百済武王治世のもので、「丁亥年」(627) ～己亥年（639）前後に限定しうる。また大阪府太子町平石古墳群のアカハゲ古墳・ツカマリ古墳では、角柱状の特異な緑色ガラス管玉が出土し、さらにツカマリ古墳では緑釉陶器製の棺台も出土した。この棺台は日本国産の緑釉陶器では最も古いものの一つであり、終末期方墳のみで構成される平石古墳群の被葬者は大伴氏説が有力で、高橋照彦氏はアカハゲ古墳の被葬者について、右大臣で白雉二年（651）に没した大伴長徳を候補に挙げる（高橋照彦 2009）。よって７世紀中葉前後に畿内・九州に流入する大量の緑色鉛ガラスは百済製の可能性が高く、「百済の調」の可能性が考えられる。

4　百済・新羅の北朝遣使との関係

船原古墳の歩揺付雲珠との比較で注目されるのが、群馬県高崎市綿貫観音山古墳の蓮華形鈴付雲珠である。新羅製馬具を共伴したが、その形状には北朝仏教美術の影響が窺え、北斉庫狄廻洛墓出土品に類似する銅水瓶も共伴した。

新羅では、『三国史記』真興王 27 年（566）春２月条に、「皇龍寺功畢りぬ。」とあり、13 年の歳月をかけて皇龍寺を完成させたとある。金堂には、丈六三尊仏が安置され、銅 35000 斤、黄金 19198 両、両菩薩が鉄 12000 斤、黄金 101336 分を費やした。高麗尺で換算すれば、５ｍの巨像である。『三国遺事』には、インドのアショーカ王より材料と文様を送ってきたと伝える。新羅から北斉（北朝）には 564 年と 572 年の遣使の記録があり、565 年には北斉により、新羅は「使持節東夷校尉楽浪郡公」に冊立された。皇龍寺建設に北斉の影響はあったのだろうか。

皇龍寺出土とされる三山冠を被る弥勒菩薩頭部（8.3 ㎝）は、頭部背面に出ホゾが残り、慶州博物館の国宝 83 号金銅製菩薩半跏思惟像金銅如来立像（93.5 ㎝）に類似し、北斉様式を示す。北斉との通行開始後の 574 年に着工し、584 年に落成した皇龍寺の西金堂に安置された仏像にも、北斉様式が及んでいたと想像される。

韓国の国宝 83 号の金銅製菩薩半跏思惟像は、簡素な三山冠を被った頭部の背後に出枘があり、本来は光背を伴っていたことがわかる。上半身は裸体で、台座も単純な円台形で、虚飾を排し洗練された写実性とプロポーションを示す。

83 号仏と同様、朝鮮半島への北斉様式の定着時期を考える上で重視されるのが中央博物館の国宝 78 号金銅菩薩半跏

思惟像（83.2㎝）である。方形台座に腰かけて右手指先を頬にあてる。台座の各面には、両肩から垂れた衣襞の文線を刻み、両面に長く批帯を表している美しいプロポーションの像である（鄭相鎬 1996）。国宝 78 号仏は、６世紀後半に、北斉様式を直接受容して製作された本格的な初期の新羅金銅仏と考えられる。よってこの仏像や、同時期の皇龍寺西金堂仏に伴う光背・天蓋・幡などの荘厳具類には、北斉様式の唐草文や動物文が表現され、アショーカ王が送ったという表現に相応しいインド系の意匠で荘厳されていたと想像される。78 号仏の頭部を飾る宝冠は、三山形に宝塔を加え、側面には鳥翼状の飾りが付設されている。これに類似するのが、藤ノ木古墳鞍後輪中央の鬼面文装飾板の顎鰓の表現で、法量的にも近い。よって藤ノ木古墳馬具は、新羅慶州で皇龍寺西金堂の仏像を手掛けた工房の作ではないかと考える。

5　隋成立との関係

鉛ガラス出現年をめぐる問題：中国の高鉛ガラスは、戦国末～漢代の前３～前２世紀頃に出現し、漢代には広く流通してガラス碗、璧、玉衣などの製品が製作され、日本列島の弥生遺跡からも出土するが、３世紀以降断絶する。

『隋書』何稠伝には、「時中国久絶瑠璃之作、匠人無敢厝意、稠以緑瓷爲之、與真不意」（中国では久しくガラスの製作が途絶え、誰も造ろうとしなかったが、何稠（「何」氏は中央アジア・クシャーニャ出身のソグド人か）が緑瓷（緑釉≒鉛釉）を用いて久しく絶えていた瑠璃（ガラス）を復活させたところ、外来のガラスと異ならなかった）とある。

隋代の鉛ガラスの実例には、陝西省西安市韓林寨呂武墓（592 年葬）出土鉛ガラス高脚杯（中国社会科学院考古研究所 1966）、広西壮族自治区欽州市久隆１号隋墓出土鉛ガラス高脚杯（広西壮族自治区文物工作隊 1984）、陝西省輝県出土舎利瓶（604 年、朱捷元・秦波 1974）、西安市李静訓墓出土瓶・杯・盒・卵形製品（608 年、中国社会科学院考古研究所 1980）、西安市姫威墓（610 没）出土瓶（陝西省文物管理委員会 1959）などである。こういったガラス製品は、すべて独特の緑色を呈する鉛ガラス製で、鋳造技法だけでなく、宙吹技法を用いた容器もあり、粘り気をもたせて細工をしやすくするため、意図的に鉛の含有量を下げた、西方のアルカリ石灰ガラスに近い成分の素材も用いられている。

またやはり高鉛ガラス製で、代表的な鉛ガラス器種の一つである曲杯は、唐代７世紀に出現する。谷一尚氏らが原州聯合考古隊を組織して 1995 年に寧夏回族自治区固原市史道洛墓（658 年葬）で中国側と合同発掘した六曲円杯は、曲杯形式ガラスの中国初現例で、以後、陝西省羊頭鎮の李爽墓（668 年葬）、固原市の史訶耽墓（669 年葬）、史鉄棒墓（670 年葬）など、その大半が、胡人墓から出土した。これらはすべて、鉛を 70%程度含む高鉛ガラス（例えば史訶耽墓出土六曲杯で 71.49%）で、中国独自のガラスと考えられる。

なお、日本の正倉院文書中にも、高鉛ガラスの製法を記した、天平６年（734 年）５月１日の興福寺西金堂造営に関する造仏所作物帳の断簡があり、黒鉛（金属鉛）を加熱熔解して鉛丹（四酸化三鉛 Pb_3O_4）を精製し、これと白石（石英、二酸化珪素 SiO_2）とを混合熔解してのち、この記述通りに製造すれば、鉛 60～70%程度となる高鉛ガラスの製法が記載されている。遣唐使等の持ち帰った舶載のガラス製造技術を、記述したものと考えられる。

以上を踏まえれば、中国における緑色鉛ガラスの復活は、隋代を遡らないことになり、最古の遺品である陝西省西安市韓林寨呂武墓（592 年葬）出土鉛ガラス高脚杯からみて、概ね 590 年を前後する頃までに出現したと考えられる。

この問題は、遣隋使開始年と密接に関わる。

宗像沖ノ島８号遺跡では、ササン朝ペルシアのカットグラス杯片が出土している。これに最も近いのは、天和四年（569）に没した北周李賢墓の出土品だが、陝西省西安市大興城興寧坊清禅寺の隋開皇九年火葬墓（589）では、円形突起を削り出した浮出切子瓶が出土している。よって北朝・新羅経由と、遣隋使将来の両方の可能性がある。

沖ノ島８号遺跡の調査区は、第１回調査の十字トレンチ及びその西の部分、中央小岩を中心とした部分、西南部分の３群に分かれる。ガラス碗破片は中央群から１片、北東群から１片出土した。北東群からはガラス切子玉１３個も出土した。緑色の鉛ガラス製で銀化している。東大寺三月堂不空羂索観音の宝冠の下部にも鉛ガラス切子玉が巻かれている。

6　崇峻朝（588～592）・上毛野臣久比の「呉国」遣使はプレ遣隋使か？

教科書では 600 年の第一次遣隋使・607 年の第二次遣隋使が定説である。ところがこれらの記録に先立つ、「プレ第一次遣隋使」が存在する可能性がある。すなわち『新撰姓氏録』（巻三、左京皇別下）に、「商長の首は、上毛野と同じ氏。多奇波世（たけはせ）の後なり。三世孫、久比、泊瀬部天皇〔本注。諡は崇峻〕御世に、呉国に遣はされ、雑宝物等を天皇に献れり。其の中に呉権（くれのはかり）有り。天皇、此の物はと勅たまひき。久比、奏して曰く、呉国は以って万物を懸け定めて、交易を為さ令む。其の名は派賀里と云ふ。天皇、勅したまふ。他人をして同じからしむること勿れと。久比の男・宗磨、舒明天皇の御代に、商長の首（姓）を負ひたり」とある。

この記事に最初に注目したのは、江戸時代の超絶的な知識人、狩谷棭斎である。棭斎は『本朝度量権衡考』（東洋文庫）に、上毛野君の同族である多奇波世三世孫の久比が崇峻朝（588～592）に呉国に遣わされ、波賀里＝権衡を持ち帰ったとする記事をひき、呉国とは隋を指すと考証し、崇峻朝の隋朝遣使を推定した。

すなわち、「按ずるに崇峻天皇の元年は、隋の文帝の開皇八年（588）にて、五年に蘇我馬子が天皇を弑し奉りしは、開皇十二年（592）なり。然らば、久比が献りしは隋称なるべし。）されど、此の御代に権衡を用ひられしこと史に見えざれば、世に普くは用ひざりしなるべし。（中略）『扶桑略記』『一代要記』に拠れば、是れも舒明天皇の御時よりぞ用ひられたるべき。（『扶桑略記』『一代要記』の文、量攷に引けり（102 頁）。按ずるに始めて呉権を献りし久比が男・宗磨、此の御代に姓を商長首と賜はりしは、権衡を世に普く用ひらるによりて賜ひしにもやありけん。）」と述べた。

もし『新撰姓氏録』の記事が事実なら、狩谷棭斎が想定したように、600 年の第１次遣隋使に先立つ最初の「プレ遣隋使」であった可能性があり、589 年の隋による中国統一に対する遣使の可能性が考えられる。

小泉袈裟勝氏も、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』には「　合度量弐拾衡　（呉量四衡　福量四衡　俵量四衡　斗四口升四口）」とあるが、「呉量」は「衡」とあるように、重量をはかるハカリで、また同じものをさすとみられる「呉斤」が『正倉院文書』天平宝字六年正月廿二日付の上院牒にみえ、さらに『新撰姓氏録』左京皇別商長首の条の「呉権」とあわせ、ハカリにも唐斤と呉斤（呉量・呉権）の別があり、呉権は隋代に将来されたと考える（小泉袈裟勝 1982）。

以上より、舒明天皇の代に商長首の姓を賜った宗磨の父、上毛野久比は、崇峻朝（588～592）に呉（陳は 588 年に既に滅んでおり、統一後の隋か）に派遣され、権衡を含む宝物を持ち帰ったことになる。

さらに付け加えれば、588 年に隋の戦艦一艘が耽羅国（済州島）に漂着すると、百済はこの一行を手厚くもてなし、その帰国を送って 589 年、隋に使者を遣わし、いちはやく中国統一を慶賀した（森公章 2010）。よって、当時百済の隋送使に随行して倭人が隋に赴いた可能性が考えられる。

鐘方正樹氏 2004 の「日中における王陵の墳形変化とその関連性」『博望』第５号の註 11 でも、「589 年に隋が陳を滅ぼして中国統一を実現するが、この年の記事として蝦夷・東方の沿海諸国・越などの諸国の境を視察させたことが『日本書紀』に記されている。同年、一隻の隋の戦艦が耽牟羅国（済州島）に漂着し、百済が丁重にそれを送り帰して陳平定の祝賀を述べたことが『隋書』百済伝や『三国史記』百済本紀にみえる。『日本書紀』の記事はこれと関連する内容であり、隋の戦艦などが他に漂着していないかを日本の沿岸で確認したのであろう。そこには、隋の中国統一という衝撃的情報を百済からすでに得ていたという背景が示唆されている。翌年の 590 年には百済へ留学していた善信尼らが帰国し、より詳細な隋に関する情報がもたらされたに違いない。」と述べる。やはりプレ遣隋使の可能性を物語る。

現在の定説では、遣隋使は 600 年（推古８年）～618 年（推古 26 年）の 18 年間に５回以上派遣されたと推定され（氣賀澤保規編 2012）るが、『新撰姓氏録』が記す１回も加えれば、日本と隋の通交は６回ということになる。

７　６世紀末～７世紀初頭の東アジア情勢―隋統一の波動

隋の中国統一によって朝鮮半島諸国が再び中国王朝の冊封を受けたが、新羅・百済より格上を自任していた倭国は、隋を中心とする国際秩序でどのような立場をとるか問題となった。591 年に発動された征新羅軍は、600 年の第一次遣隋使以降、607 年の第二次遣隋使の間までに征新羅軍を収拾する必要があったと考えられる。

隋の二代皇帝煬帝は、604 年、病床にあった文帝の急死に際し、遺詔と偽って楊勇を殺して即位した。605 年、東都洛陽城を修築し地方の富商を集め、さらに男女 100 万人を動員して黄河と淮水とをむすぶ通済渠を開削、淮水と揚子江とをつないで江都にいたる運河を改修し、608 年には揚子江から涿郡にいたる永済渠を開削した。

大業５年（609 年）、西域安定のため、煬帝は自ら軍を率いて張掖（甘粛）に赴いたが、祁連山脈で風雪に見舞われ大被害を出し、実の姉も寒さから病死した。吐谷渾王を包囲し、10 万余りの兵を降伏させた。この余波で高昌国が西域 27 国の首領を率いて拝謁を願い出、西域数千里の土地を献じた。その後、隋は西域に西海、河源、鄯善、且末の四郡を置き、シルクロードの通行を確保した。翌 610 年の旧暦１月 15 日、西域各国の使者や商人が多数洛陽を訪れ新豊に国際貿易市場を開設してほしいと願い出、煬帝は周囲８kmの会場に楽士 18000 名を動員し、半月に渡り盛大な宴会を挙行した。この前後、西域の商品が隋に溢れたと考えられる。609 年１月 27 日に洛陽に至った倭国の遣隋使たちも、この盛大な宴会に出くわし、ペルシアガラスの杯を入手し、帰路、沖ノ島の海神に供えたと考えるのは楽しい想像だ。

617 年、唐高祖・李淵が挙兵して長安に入り、煬帝は揚州の江都離宮で酒色に耽溺し、臣下の諫言を聞かず、さらに南への遷都を企て、遂に側近の宇文化及将軍や近衛兵たちによって絞殺され、隋は滅びた。蕭皇后と女官は、赤い漆塗りのベッドの板で棺を作って煬帝の遺体を納め、江都宮内の流珠堂に埋葬した。江都の将軍陳稜は煬帝の恩に報いるため呉公台に改葬した。唐が江南を平定すると、武徳五年（622）、唐高祖・李淵は煬帝の墓を揚州の北にある雷塘に改葬するよう命じた。貞観二十二年（648）に蕭皇后が病死すると、唐太宗・李世民は煬帝と合葬させた。

2013 年３月、上海に近い江蘇省揚州市で隋の煬帝（在位 604～618 年）と、婦人の蕭皇后の墓がみつかった。発掘調査の結果、「隨故煬帝墓誌惟隨大業十四年太歳……一日帝崩于揚州江都縣……於流珠堂其年八月……西陵荊棘蕪……永異蒼悟……貞観元年……朔……葬煬……禮也方……共川」銘の墓誌や十三環蹀躞金玉帯など貴重な文化財が出土し、その後、この発見は「2013 年中国考古６大新発見」の一つに位置づけられた。

８　征新羅軍の発動と中止

『日本書紀』によれば、崇峻天皇四年（591）十一月、崇峻天皇は、「任那」の再興を企て紀男麻呂、巨勢猿、大伴嚙、葛城烏奈良を大将軍とする２万余の軍勢が筑紫に派遣されている。大将軍はいずれも物部氏打倒に際して蘇我氏に協力した各氏から選ばれた。副将軍と隊長には氏々の臣・連が任じられた。しかし 592 年に崇峻天皇が暗殺されたため、新政権は飛鳥寺を政堂とし、「筑紫将軍所」には内乱で「外事」を怠らぬよう駅馬を走らせている。

602 年には、来目皇子が「撃新羅将軍」となりこのとき「諸々の神部、および国造・伴造」を含む「軍衆」25000 人を率い筑紫に到着した。しかし 603 年には、筑前国嶋郡（前原市・志摩町）で船舶・軍糧調達中に来目皇子が病没し、その報は大和へ駅使によってもたらされた。後任の当摩皇子は赴任途上の明石で妻の舎人皇女が病死したため新羅派兵計画を中止した。来目皇子の遺体は河内の埴生の岡の上に葬られた、とある。大阪府羽曳野市塚穴古墳が、「来目皇子埴生

崗上墓」に治定されており、一辺53～54m、高さ約10m三段築成の方墳で、埋葬施設は切石積の岩屋山式石室である。

以上、崇峻天皇の崩御（592）は駅馬が、来目皇子死去（603）の報も駅使によって大和・筑紫間を伝えられたとされている。征新羅軍の発動が、駅馬・駅使の普及契機となったことを窺わせる。

9　春米部・乳部と上宮王家と花形馬具

京都妙心寺鐘（698）に見える「糟屋評造春米連廣國」は、糟屋屯倉管掌者の後裔と考えられる。

587年、蘇我馬子と物部守屋の対立が激化し、「崇仏戦争」が勃発する。物部守屋の敗死後、物部傘下の渡来人や部民、その所領は、蘇我氏や加担した王子たちに分配された。よって587年以降、上宮王家の名代部として壬生部や春米部が設定され、聖徳太子から誕生した山背大兄王のために壬生部が伝領されたのに対し、春米部は誕生した女王の養育にあてる財産となったため、この女王は「春米女王」と名乗ることになったと考えられる。よって春米女王は山背大兄王の異母妹で、のち兄妹で結婚して妃となり、夫との間に、四人の子供を生んだ。春米女王と山背大兄王の結婚で、壬生部と春米部は一体化した可能性が高い。聖徳太子の死後、蘇我馬子の子・孫にあたる蘇我蝦夷・入鹿の専横が激しくなり、「今来の並び墓」の造営では、蘇我氏が上宮王家の乳部（壬生部）を使役したことに対し、春米女王は激しく憤り、蘇我一族を強烈に批判した。このため山背大兄皇子と春米女王は蘇我氏に危険視され、斑鳩襲撃を受け、一旦は脱出したが、春米女王は夫や子供達と共に自害した。

ここで注目されるのが、船原の遺物埋納坑で出土した花形鏡板・花形杏葉のセットである。桃崎はこの形式の馬具の分布が、壬生部の分布と密接に関わることを指摘した（桃崎祐輔 2012）。壬生部の全国設置は推古十五年（607）とされる。最古の型式は、群馬県伊勢崎市稲荷山古墳の出土品だが、船原出土品は、これに次ぐ非常に古い型式である。

糟屋地域にはいまのところ壬生部の明確な証拠はないが、古賀市鹿部山経塚で出土した鋳銅製経筒に、「筑前国席内院／父々夫峯／奉書写如法妙法蓮華経／永久元年歳時癸巳十一月八日／一部八巻供養既了」「願主僧良意／金主吉野常元」の銘文があり、「鹿部」は「父々夫」の転訛と判明する。「チチブ」は、聖徳太子・山背大兄王の部民である「壬生部」の別記、「乳部」の可能性がある。よって糟屋の壬生部・春米連氏の集団からは、山背大兄・春米女王に奉仕する舎人や采女などを輩出したと考えられ、船原出土の花形鏡板・杏葉はその具体的遺物である可能性が考えられる。

10　古賀市鹿部田渕遺跡建物３は日本最古の大規模厩舎遺構の可能性

1999年の鹿部田渕遺跡１次調査でＬ字形に配置された官衙的大型建物２棟・倉庫２棟が見つかった。このうち建物３は両端が削られていたが、４×９間の廂付側柱建物で、主軸Ｎ－14°―Ｅの南北棟である。桁行全長は現状で17m、梁間全長約７m。建物内部に長方形掘方に径20㎝前後の２本柱を立てて８列前後の仕切を設ける。身舎面積は119㎡以上。付近からは６世紀中頃～７世紀初頭の須恵器が大量に出土した。古賀市教育委員会は、小田富士雄氏らの見解を踏まえ糟屋屯倉内の管理施設で、花鶴川河口の入江に面して設けられた港湾管理施設と考えた。

市大樹氏は、「すでに大化前代にも早馬の制度が存在したと考えられる。すなわち、『日本書紀』の崇峻紀以降、大和－筑紫間の連絡に関わって「駅使」「駅馬」「馳駅」の語がみられるが、これらの語の古訓は「はゆま」であった。589年の隋による中国統一を大きな契機として、東アジアが緊張に包まれるなか、大和―筑紫間に早馬制が整備されたと考えられる。ただし、令制下のような独立した駅家が置かれたとは考えにくい。おそらく、倭政権の影響力の強い屯倉などの拠点に馬を配備し、緊急事態に備えたものと推測される」と述べている。

隣接する楠浦・中里古墳群は、馬具装着殉葬馬痕跡４基がみつかり、駅戸集団の墓と考えたい。なお律令期の席打駅は、15頭の馬がいたという。鹿部田渕遺跡は席打駅の前身と考える。内部に柱と間仕切りが密生するため政庁や倉庫とは考えにくく、本来は４間×10間と考え、内部に10頭前後の馬匹を繋飼できる８列の間仕切り柱のある厩舎遺構と考える。

Ⅴ　結語

1　まとめ

船原古墳の馬具のうち、花形鏡板付轡・杏葉は、国産が確実視される馬具で、聖徳太子の一族である上宮王家の名代部である「壬生部」の分布と重なり、壬生部舎人の装備であったと考えられる（桃崎祐輔 2012）。古賀市鹿部山経塚の経筒銘に「父々夫峯」とあり、「鹿部」（シシブ）はもともと「父々夫」（チチブ）と発音し、チチブ＝乳部＝壬生部であった可能性があることが注目される。鹿部田渕遺跡建物３は征新羅軍発動前後に糟屋屯倉内に設けられた馳馬（はゆま＝早馬）の施設で、楠浦・中里古墳群は早馬を管理する「駅子」的な集団の墓、これに対し船原古墳は、「駅長」の墓と考えたい。船原古墳の大量の馬具は、鹿部田渕遺跡の厩舎の早馬に装着し、大型鋳銅鈴はプレ駅鈴であったと考える。

船原古墳遺物埋納坑の馬具のうち心葉形忍冬文鏡板付轡・双鳳凰文杏葉・鉛ガラス嵌入辻金具・雲珠は、新羅製の舶載品と考えられ、鉛ガラス使用からみて590年代以降の年代が推定され、600年前後の築造と推定される。

糟屋の一首長のためとは考えにくい大量かつ豪華な一括遺物群は、背後に国際的な重大事件の影響を感じさせる。

征新羅軍の有力指揮官で、筑紫と飛鳥の早馬による通信に深く関わるとともに、新羅との和平交渉を進めていたような重要人物が603年に近い時期に死亡し、その葬儀に日本・新羅双方から参列者があったとは考えられないだろうか。

門田誠一氏は、「百済が唐と新羅の連合軍に敗れて滅亡した後で、もとの百済王子と新羅王が、やはり白馬を殺してそ

の血をすすって盟約したという記事があります（665年、『三国史記』新羅本紀・文武王五年、『旧唐書』百済国伝、『冊府元亀』外臣部・盟誓その他）。（中略）七世紀の後半の段階において、複数の国が関与する国際的な会盟の際にも、やはり馬を殺して盟約をしていたことがわかります。」と述べる（門田誠一 1993）。２号土坑で検出された素環轡・リン反応・破砕須恵器が物語る馬具と馬骨の埋納、共食儀礼は、征新羅軍の終結に関わる殺馬儀礼の可能性はないだろうか。

２　今後の保存と活用

以上、船原古墳の馬具埋納土坑は、極めて高い考古学的・工芸的・保存科学的・古墳時代史的意義をもっている。

文化庁もこれを認め、船原古墳と埋納遺構があわせて国指定史跡となり、古賀市も公園化と保存活用への準備を進めている。出土品は今後国指定の重要文化財となり、さらに国宝に昇格する可能性もある。古賀市の宝として地元で保管していくには、防災警備体制の整った博物館を整備し展示できることが大前提となる。

国指定史跡となった現在、次の課題は、８～10年はかかると考えられる船原古墳群・出土遺物のクリーニングと調査研究および調査報告書の刊行まで、いかにモチベーションを維持しながら取り組んでいくかということになる。日本が世界に誇る文化財の一つとなることはもはや疑いなく、古賀市のシンボルとして活用が期待される。しかし研究なくして活用なし。研究と活用をバランスよく進めていくことが肝要だ。

主要参考文献

諫早直人 2013「馬具の舶載と模倣」『技術と交流の考古学』岡内三眞編　同成社　pp. 348-359.

諫早直人 2015「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要』2015　奈良文化財研究所

内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県八雲立つ風土記の丘資料館　松江　pp.42-47.

内山敏行 2011「毛野地域における六世紀の渡来系文物」『季刊考古学』別冊

内山敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集　pp. 313 - 324.

太田博之 1994「埼玉将軍山馬冑資料の基礎的研究」『日本考古学』１号

岡安光彦 1990「鉸具造り立聞系環状鏡板付轡編年早見表」『後期古墳出土共伴遺物複合の編年　発表要旨』

小田富士雄 2003「「糟屋屯倉」遺跡の発見とその意義」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会　pp. 547-557.

勝部明生 2000「藤ノ木古墳鞍金具文様の考察－亀甲繋ぎ文」『由良大和古代文化研究協会紀要』第六集

勝部明生・鈴木勉 1998『古代の技－藤ノ木古墳の馬具は語る』吉川弘文館

神谷正弘 2002「藤ノ木古墳出土金銅装鞍について」『考古学ジャーナル』№482　ニューサイエンス社　pp. 17－20.

狩谷棭斎　冨谷至校注 1991『本朝度量権衡攷』東洋文庫 537　平凡社

古賀市教育委員会 2004『船原古墳群Ⅰ』福岡県古賀市谷山・小山田所在古墳群の調査報告第１集　古賀市文化財調査報告書　第36集

古賀市教育委員会 2005『楠浦・中里遺跡』古賀市文化財調査報告書

古賀市教育委員会 2014『船原古墳遺物埋納坑発掘調査速報』古賀市文化財調査報告書　第64集

古賀市教育委員会 2016『船原古墳　Ⅰ』　古賀市文化財調査報告書　第68集

古賀市教育委員会 2019『船原古墳　Ⅱ－１号土坑出土遺物概要報告編―』　古賀市文化財調査報告書　第73集

小林啓・加藤和歳・岩橋由季・甲斐孝司・森下靖士 2016「船原古墳遺物埋納坑出土馬冑の科学的調査」『嶺南考古學會・九州考古学会　第12回　合同考古學大會　日韓の装身具』発表要旨集　九州考古学会・嶺南考古学会　pp. 363-368.

白井克也 2007「梁山夫婦塚における土器祭祀の復元」『東京国立博物館紀要』第42号　pp.123-203.

白木原 宜 1997「古墳時代の鈴―主として鋳造鈴について－」『HOMINIDOS』VOL.001　CRA　pp.71 - 81.

白木原 宜 2002「鋳造馬具の地域性－特に馬鈴について－」『考古学ジャーナル』2002年12月号　北隆館ニューサイエンス社　pp.

玉城一枝　1987　「中国・朝鮮系の文様をもつ馬具について―杏葉・鏡板を中心として―」『同志社大学考古学シリーズⅢ　考古学と地域文化』

玉城一枝　1996　「古墳時代のパルメット唐草」（山本忠尚　1996）『日本の美術３　№358　唐草紋』至文堂　収録）pp.85-90.

千賀久 2003「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学』Ⅲ交流と交易　後藤直・茂木雅博編　同成社　pp.101-127

土生田純之 2010「古墳時代後期における西毛（群馬県西部）の渡来系文物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集　pp. 181-195.

宮代栄一 1998「後期古墳と終末期古墳の馬具」『第43回　埋蔵文化財研究集会　前方後円墳の終焉』埋蔵文化財研究会　pp. 85-91.

宮代栄一 2002「古墳時代の馬装の変遷－アセンブリッチに基づく馬具の複合的分析－」『地域考古学の展開－村田文夫先生還暦記念論文集－』pp. 189－201.

宮代栄一 2016「群馬県高崎市観音塚古墳出土馬具の再検討―８組の馬装の復元とその性格―」『埼玉考古』第51号　埼玉考古学会　pp. 91-114.

桃崎祐輔 2002「九州地方における騎馬文化の特質と軍事的背景」『考古学ジャーナル』496　pp. 15-19.

桃崎祐輔 2003「斑鳩藤ノ木古墳出土馬具の再検討―３セットの馬装が語る６世紀末の政争と国際関係―」『市民の古代研究会・関東』第３回講演　pp. 80 - 160.

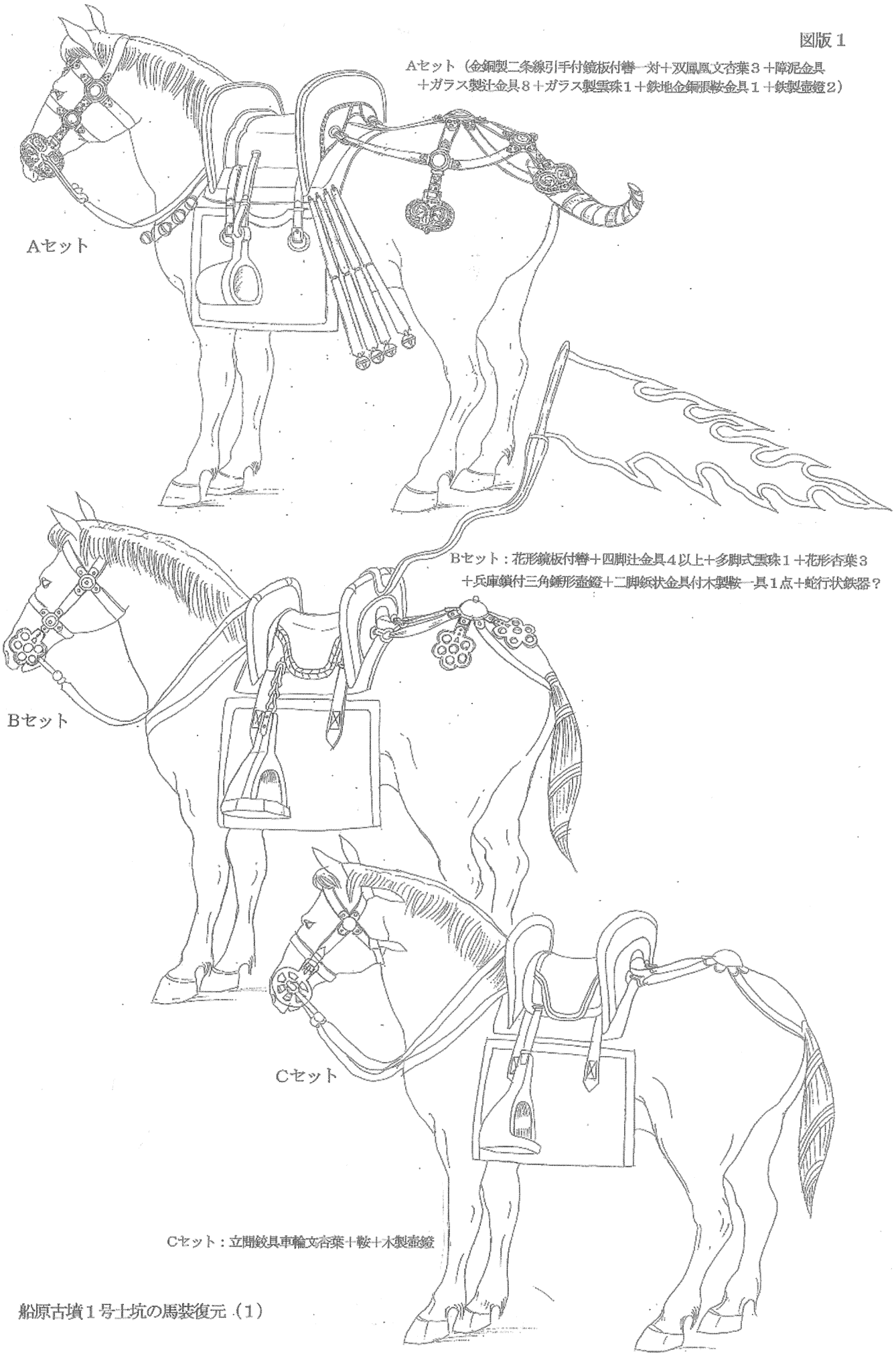
桃崎祐輔 2012. 3. 16.　「大塚南古墳の花形鏡板付轡の検討」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書120集　pp. 281-297.

桃崎祐輔 2013.6.7.「福岡・古賀市の谷山北地区遺跡群　金銅製の馬具一式出土　「主」は新羅と関係か」『西日本新聞』2013年６月７日　11　文化面

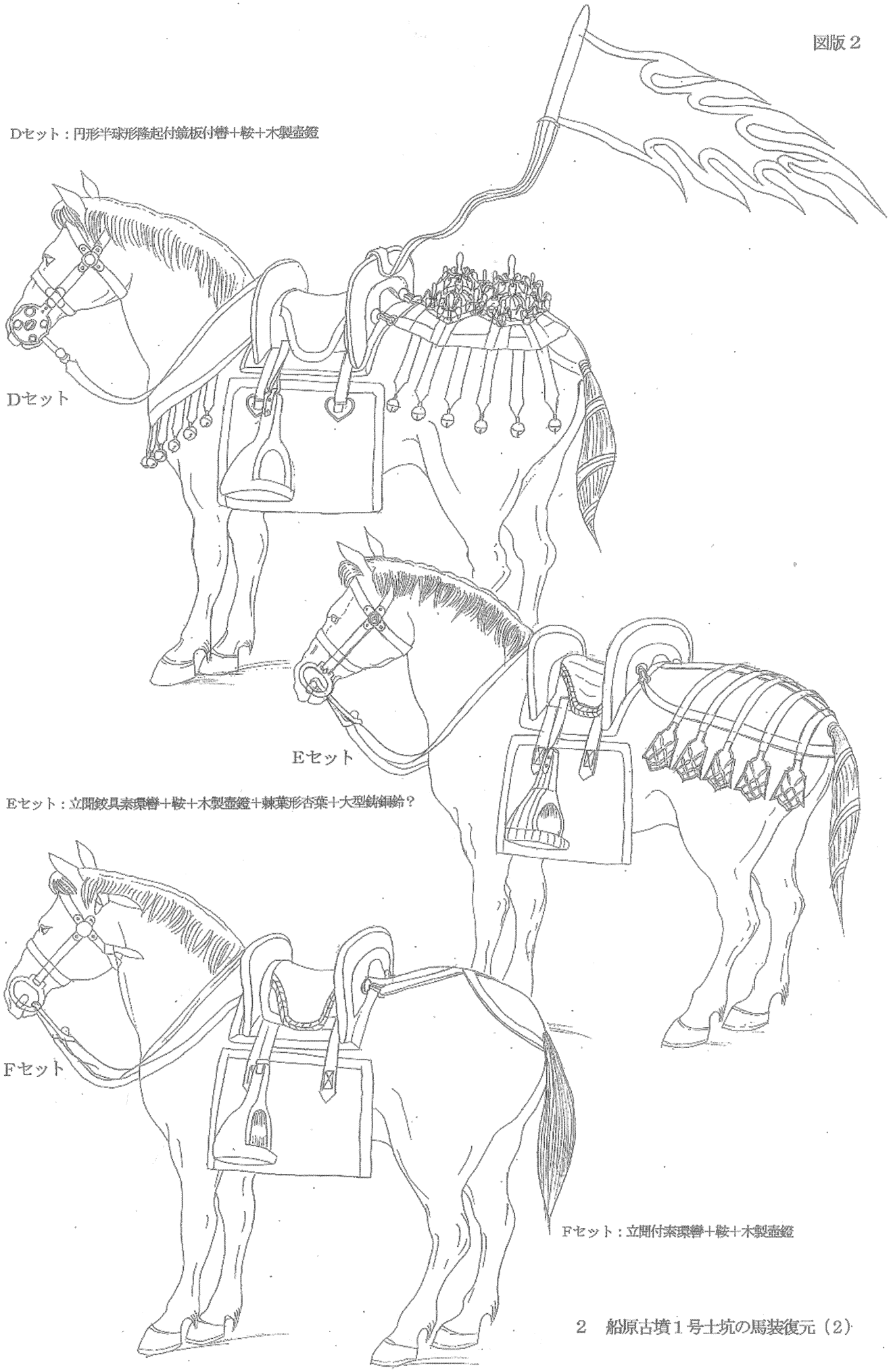
桃崎祐輔 2014.12. 1.「福岡県古賀市　船原古墳群の馬具埋納坑とその歴史的背景」『西日本文化』通巻469号　西日本文化協会　pp.20-23.

門田誠一 1993「点景・牛と馬の古代」『海でむすばれた人々―古代東アジアの歴史とくらし』同朋舎出版　pp.106-118.

図版１



１　船原古墳１号土坑の馬装復元（１）



２　船原古墳１号土坑の馬装復元（２）

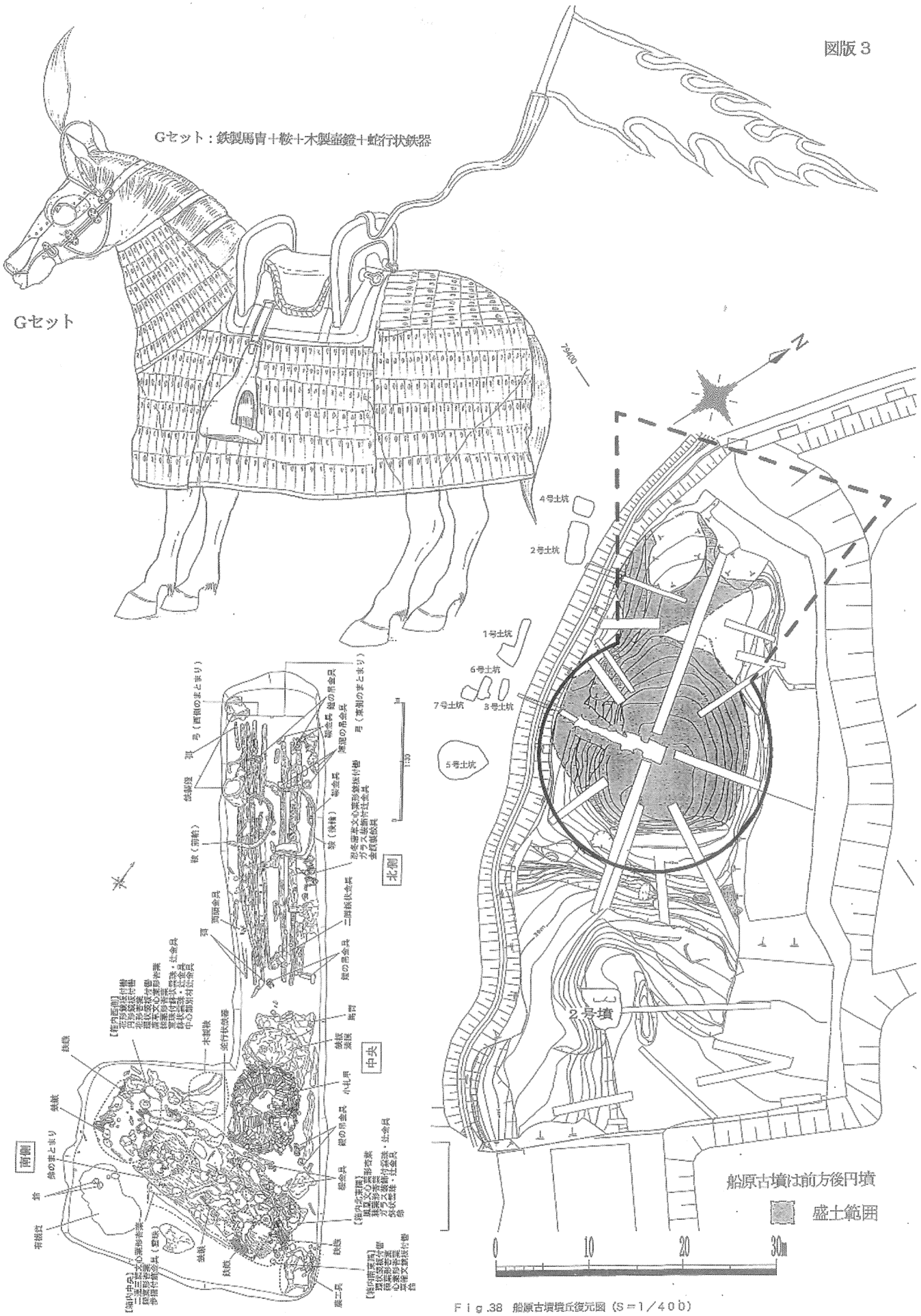
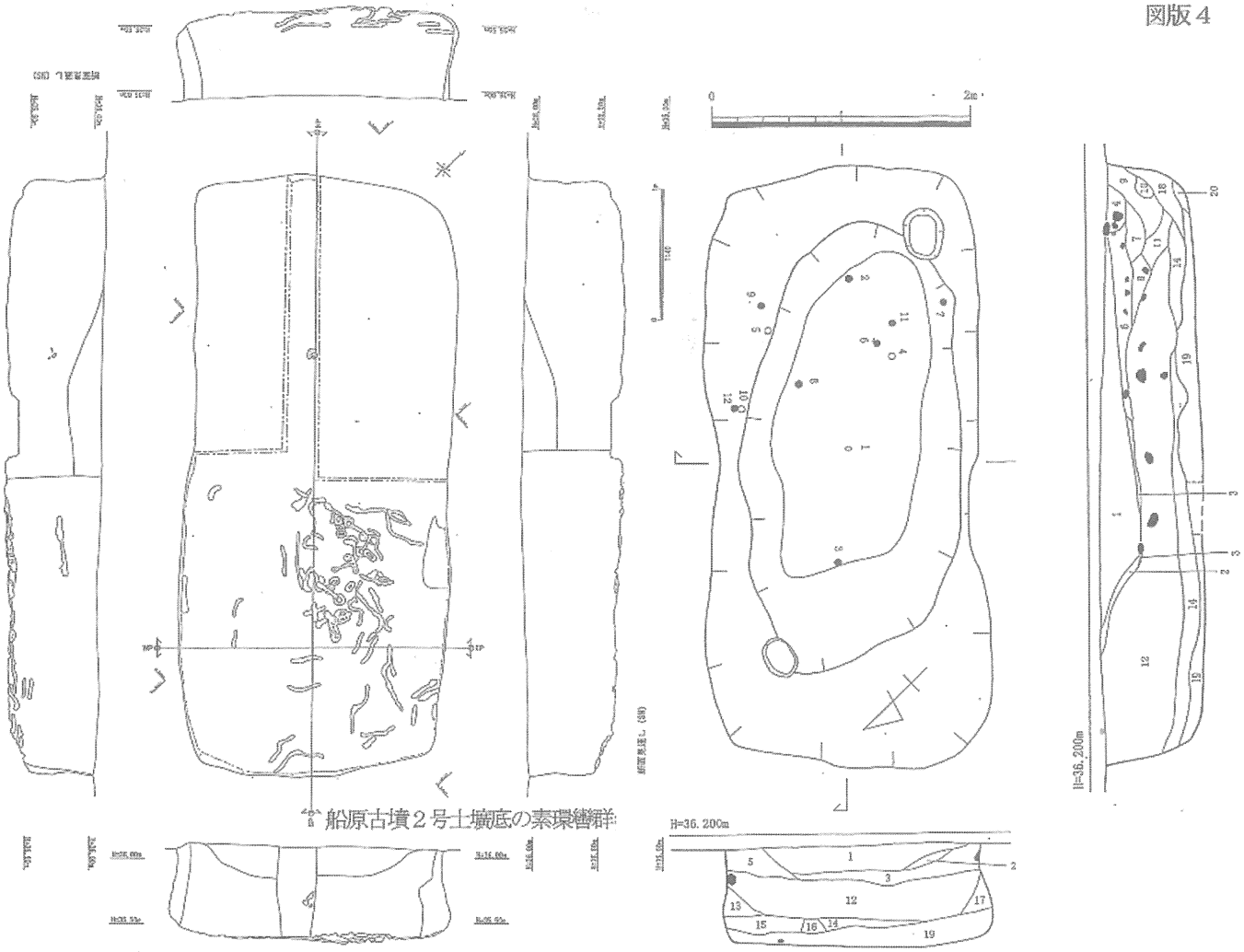


Fig.4　船原古墳１号土坑遺物出土状況（S=1/30）

Ｆｉｇ.38　船原古墳墳丘復元図（Ｓ＝１／４００）

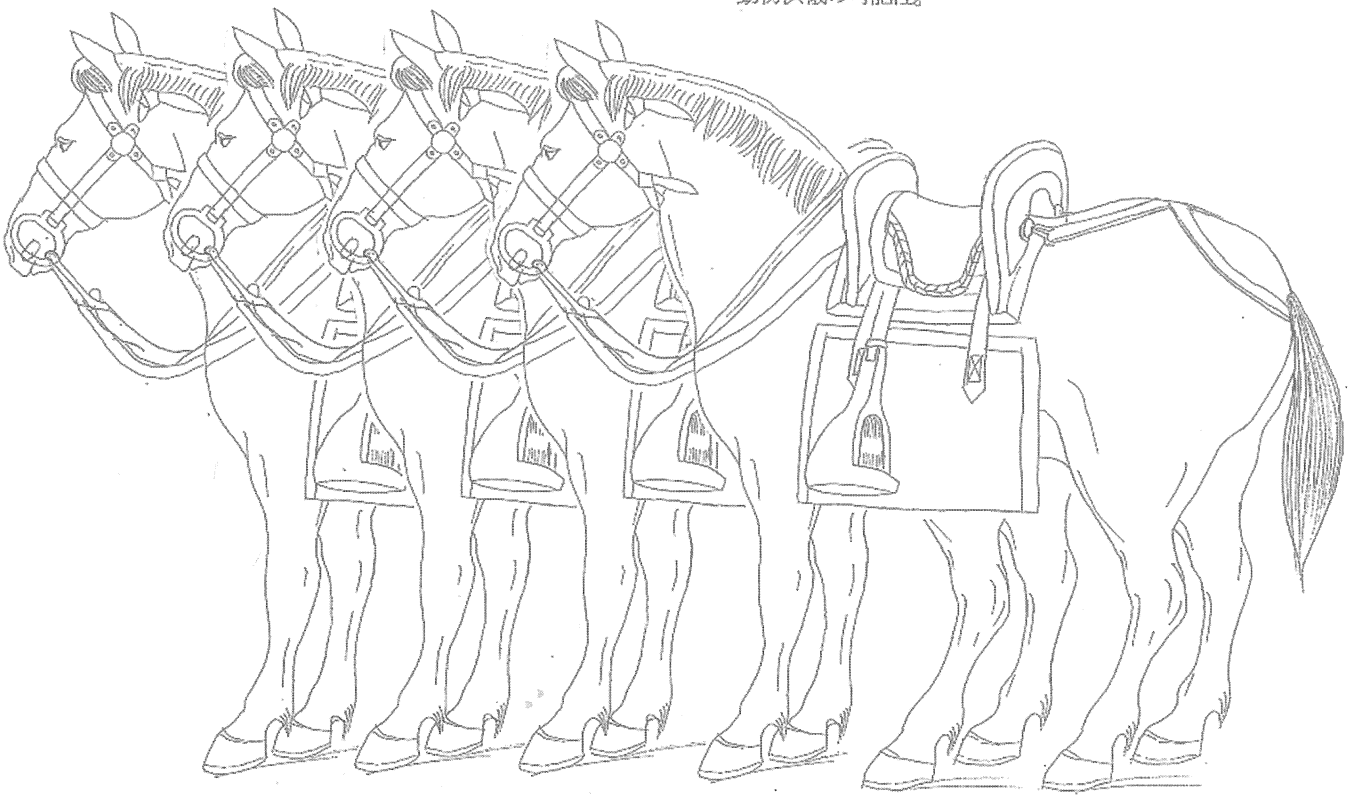
３　船原古墳１号土坑の馬冑装馬



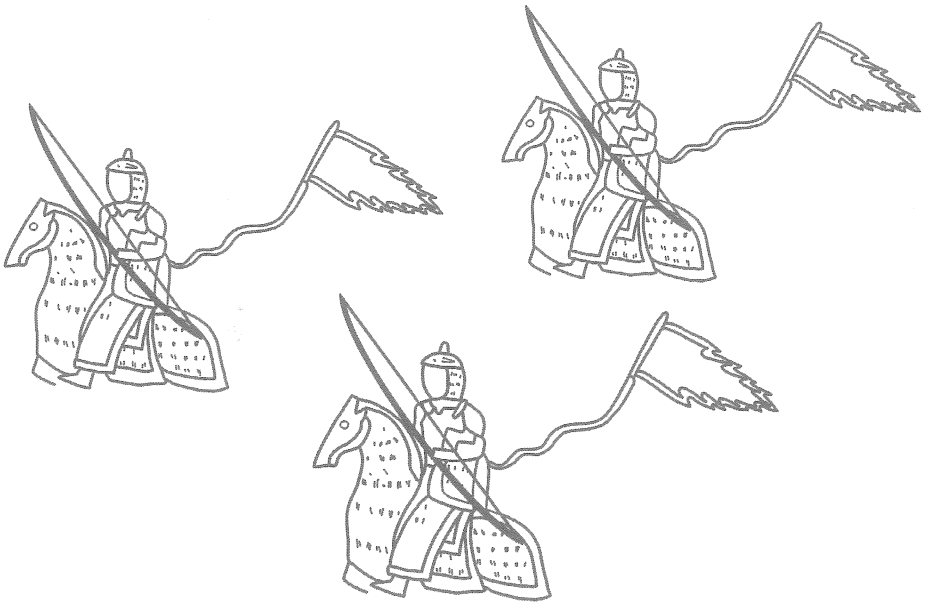
Ｆｉｇ.26　船原古墳２号土坑遺構図（Ｓ＝１／４０）

Ｆｉｇ.27　船原古墳２号土坑土層断面図及び分析試料採取位置（Ｓ＝１／４０）

船原古墳２号土壙の土壌分析ではリン・カルシウム反応あり。
動物供犠の可能性。



４　船原古墳２号土壙の素環轡４点とリン・カルシウム反応、殺馬儀礼の可能性



令和元年度 船原古墳講演会

『ここまでわかった！
船原古墳１号土坑の中身！！』
講演会資料集

2019（令和元）年 11 月 28 日

発行　福岡県古賀市教育委員会
福岡県古賀市駅東１丁目１番１号

印刷　有限会社　システム・レコ
福岡県古賀市今の庄３丁目 13 番１号